

## レンガ塀も崩れる街角 やっぱり雨季は怖い

カトマンズでは、7月12日頃から3日連続で雨が降った。常々思っているが、最近の気候は異常だ。夕立と強い日差しでのメリハリが全くなく、止むことなく降り続いた。普段通勤で難なく通っている水たまりが池になり、やがて湖になった。3日目に車が波乗り状態になった時にはさすがに恐怖におののいた。その湖状態の角の家は床上浸水だった。

我が家は坂の途中にあるが、この集中豪雨の間に、坂の上の家の庭の排水が道に溢れだし、坂は溪流と化した。幸い我が家は表の道からは路地裏に入ったところにあるため直接の被害はなかったが、水の流れは舗装された道を無惨にえぐり、坂沿いの家のレンガ塀は崩れてしまった。

湖の角の家もレンガ塀が無惨に崩れていた。所用があって近所のサネパのメインロードを歩いていると、2カ所の家の塀が崩壊していた。ネパールでは、セメントをケチって少量で済ませたり、セメントの代わりに泥を使ったりする。ついでに言うと、レンガの積み方もいい加減で手で押しても崩れそうな塀も多い。手抜きは雨季に入ると歴然とわかる。

最近ネパールに来た調査団のメンバーが、食あたり水あたりで軒並み倒れている。きつい季節なのである。(浩司)

## ネパール式トウモロコシの食べ方

カトマンズの街を歩くと道ばたで焼きトウモロコシを売っているのを見かけます。焼きトウモロコシと言っても日本の焼き方とはちょっと違ってきます。日本では、遠火であぶり、醤油を付けて観光地やお祭りで売っていますね。しかし、ここカトマンズでは直火焼きで、浅めの中華鍋のような物の中に火をおこしその上にトウモロコシを置き、焼きます。こうして焼いたトウモロコシは、所々焦げていて美味しそうに見えず、私はずっとまずそうだなと思っていました。

ところで、今はトウモロコシの最盛期で、我が家の小さな畑にもトウモロコシがなっています。初めはこのトウモロコシを「固くて美味しくないな。やはり日本のトウモロコシの方が美味しいな。」と思いながらゆでて食べていました。

ところが、ある日使用人の小屋に行くと、彼等が道端で売っているのと同じように直火でトウモロコシを焼いて食べているではないですか。そのトウモロコシはやはり所々黒く焦げていて、「美味しいのかな。」と思いながら見ていると、彼等が、「あなたも食べて下さい。」と言って2本くれたのです。恐る恐る食べてみると・・・、香ばしく、歯ごたえがあって、ゆでるよりもはるかに美味しかったのです。そこで思ったのは、「その土地の食べ方で食べた方が美味しいのだな。」ということです。この他の食べ方として炒ってポップコーンにする方法もあります。ネパールのトウモロコシはポップコーンにして食べるのが私には一番美味しいですね。もっとも、トウモロコシは消化が悪いので、食べ過ぎないように注意したいと思います。(美澄)

## シータにお化けが憑いた

我が家にはKCとシータという夫婦が住み込みで働いています。彼等はとても働き者で彼等のお陰で不自由なくネパールで暮らしていられます。6月にシータが妊娠していることが解り、つわりのためどんどん食欲がなくなり、6月下旬には切迫流産をおこしかけて2週間ほど入院しました。赤ちゃんは無事で、帰宅後1週間程寝ていましたが徐々に元気を取り戻し、このまま元のように元気なシータになるかなと思っていた矢先に突然また具合が悪くなったのです。

翌日シータのお婆さんと母親が様子を見に来て、シータに言ったことは、「この家の回りにT字路があるから、T字路にいますお化けが憑いたに違いないので、祈禱師にお払いしてもらいなさい。祈禱師の叔父さんに来てもらうように言うておくからから。」ということでした。・・・そう、ネパールではお化けや祈禱師(ジャックリーと言います)が信じられていて、特に村では病院などないので、病気になった時は祈禱師にお払いをしてもらうのです。実は、彼女は6月上旬に食事を受け付けなくなったので、ドライバーのクリシュナの勧めで別の祈禱師の所に行ったのです。その祈禱師は何人も人が並ぶ人気のある祈禱師という事でしたが、謝礼はお金がないから500ルピーで良いと言うことでしたが、彼女の給料が3千ルピーであることを考えるとかなり高額です。しかし今回は彼女の叔父さんと言うことで、ただだそうです。

数日後、叔父さんが来て、まず家の回りを清めて、煙を炊き(お線香のようなもの)、呪文を唱えほうきでシータの肩や頭を払ったり、息を吹きかけてお払いをしました。

その後彼女の体調は問題なく、日々元気になっているのでお払いの効果があったという事でしょうか?(美澄)

## 在留邦人はファミコンにはまる 過ぎたるは及ばざるが如し

昨年10月に私がネパールに赴任する時、多くの人から受けたアドバイスが「娯楽が少ない土地だからファミコンを持って行くとよい。」というものだった。このアドバイスを忠実に守り、私はソニーのプレイステーションを購入し、美澄の渡航時や一時帰国時に少しずつゲームソフトを買い足してきた。はっきり言って持って来て正解だったと思う。加藤次長のお子さん、正高君や幸子ちゃんが来てこれで遊んでもらえるし、プレイステーションのハードはCDプレイヤーとしても使える。但し、何事もやり過ぎはいけぬ。美澄と2人で「60分3本勝負!」などとプロレスゲームをやっているうちはまだいいが、ダービー馬を育てるために1人夜更かしするようになったらまずい。(浩司)

## 私の仕事紹介 (その5) 小学校建設計画

7月下旬に、特定テーマ評価調査団とNHKラジオジャパンがほぼ同時期に来た。いずれも事前の準備段階で、日本の無償資金協力で建てられた小学校を訪問したいとの依頼があり、いずれも授業風景を見たいと希望していたが、残念ながら、こちらでも只今夏休みのシーズンで、登校日という名目で生徒は集められても授業は難しいことを了解の上でアレンジをした。

日本は過去2年間ネパールの5郡で949教室を建設するための資材資金の供与を行っている(今年度は10郡で展開)。ラジオジャパンのプロデューサーは22、23日にカトマンズから車で4時間のチトワン郡で取材、調査団は25、26日に3時間半かかるヌワコット郡で現地調査を行ない、いずれにも私が同行した。週に2回の国内出張は正直言ってかなり疲れるけれど、平野部(チトワン)と山間部(ヌワコット)の学校を比較し、その教育事情を理解する丁度良い機会だった。紙面の都合もあり、ここでは学校建設だけに特化して少し紹介したい。

日本が無償資金協力をしている相手は、基礎初等教育プロジェクト(BPEP)という教育省のプロジェクトであり、これは世界銀行やDANIDA(デンマーク)、ユニセフ等の援助機関との連携案件である。小学校建設へは世銀も資金供与しているが、誰もが日本の無償で建てた学校の方が出来映えが良いと言う。これは、世銀の建設資金は住民に渡され、資材の調達を住民自らが行わなければならないのに対し、日本の無償では調達業者がレンガやセメント等の必要資材を建設工程に合わせて適宜搬入してゆくの、住民は必要な資材を必要な時期に必要な量だけ手に入れることができるためである。従って、壁材としてレンガを使っているチトワンでは、日本の支援した小学校は一見して明らかほどに出来に差が生じるのである。

しかし、ヌワコットでは山間部向けのBPEP統一規格を採用し、壁材として河原の石を使っているため、世銀と日本の差はあまりはっきりとしない。また、ネパールの山間部では民家が山の尾根づたいにあるため、小学校も山の上であり、資材を運び上げるのも、施工管理担当者が訪れるのも大変で、建物の出来映えは必ずしもよくない。折角校舍はできたけれど、机や椅子がないから相変わらず地べたに座って授業を受けなければいけない。日本だったら自宅の子供部屋くらいのスペースに50人近い子供が座って授業を受けるのである。

その一方で、どう考えても教室数が足りている学校に世銀の教室が建てられていたりすることもある。ヌワコット郡は現閣僚を3人(但し1名は8月上旬に辞任)も輩出する政治力の強い郡であり、あからさまな利益誘導が行われている感じである。でも、これは明らかな無駄である。片や寿司詰めの教室で授業を強いられている児童もいるのに、広いスペースでゆったり授業を行なえる学校が、まだ施設が足りないと平気で言うのである。どこの国でも政治が介入すると事業の平等性が歪められてしまう。こういうことが、日本の無償資金協力でも起きないように、我々は気を引き締める必要があると思う。

子供に罪はない。子供を学校に行かせず農作業を手伝わせる親、暗記中心の詰め込み教育で高圧的に児童に接するのが教育だと勘違いしている教師、自分の再選しか頭にない政治家の介入等、子供をとりまく環境を改善してゆかないと、この国には将来がないと思う。子供達の笑顔を見ていて、なんとか健やかに伸び伸びと育ててほしいとしみじみ感じた。(浩司)

## 美澄の公立学校見学記

7月25日、あるパーティーで知り合ったクリシュナ・ブラダンさんが校長先生をしている「Tyouda Madhyamic Vidyalay」と言う公立の学校を見学してきました。学校はカトマンズの中心部のアサンのおそばにあり、私でも腰を曲げないと通れない程低い門を抜け、「こんな所に」と思うような所にありました。生徒は幼稚園から10年生まで、約750名、朝(6:00~11:00/8~10年生)と昼(11:00~17:00/幼稚園~7年生)の2部制で授業をおこなっています。

ネパールでは一般に教育が盛んで、親は子供に少しでも良い教育を受けさせるために、経済的に無理をしても良い学校(私立校)に通わせようとします。私立校と公立校では設備、教科、教え方も異なり公立校は全ての面で劣っています。しかし、この学校では英語を1年生から教え(ネパールの教育課程では4年生から)、教科書も国が決めたカリキュラムに基づく教科書(1種類のみ)のみならず、自分たちで独自に選んだインド製教科書を使ったカリキュラムを行ったり、コンピュータを5年生から10年生に教えたり(今年から)と、私立の学校に遅れを取らないように頑張っていました。知人から他の公立校が、寿司詰め状態の教室、威張っているだけの先生のことなど、かなりひどい状態だと聞いた後に見に行っただけでかなり良い印象を受けました。世田谷のロータスクラブの寄付により校舍の一部の建設し図書を購入しており、また寄付を受けられれば教材を買いたいと言う希望があるようでした。やはり自分達の財政だけで運営していくのは難しいようです。

同じ公立校でも、田舎と都会、同じ都会にある学校でも受ける教育の内容が異なるため、学校選びの大切さを痛感するとともに、生まれてくる場所、家によってチャンスを得る機会があまりにも違うことを感じた1日でした。(美澄)

## 編集後記

★NHKの坂上さんを拙宅にお招きした際、7月号で紹介した日本語講座の「タケダクニヒサ」氏の話をしたところ、「英語放送をこういうふうに聴いて下さっているリスナーの方もいらっしゃるのか。」と感激され、同講座のテキストを送っていただくことになりました。タケダ氏は今も相変わらずとぼけた口調でご活躍中で、毎週水、金曜日の朝7時25分が楽しみで仕方ありません。はっきり言って、爆笑して目が覚めます。(浩司)

★私がいつも野菜を買いに行くタルカリバザール(野菜市場)はゴボウなどもありたいの物が揃うので、ローカルの八百屋(品数も少なく全体に小粒な野菜ばかり)には目もくれず、全てそこで調達していました。ところがある日いつものように野菜を買いに行くと、市場が完全に壊されていて顔馴染みのおばさんやおじさんがいないのです。途方に暮れながらも探しているとうまく顔馴染みの顔を見つけ、なんとかその日は野菜を調達することが出来ました。市場が壊され、他に移ることは私が来た1月からあった噂だったのですが、そんな様子がいっこうになかったのでの安心していたのです。が、ネパールではある日突然、何の前触れもなく物を壊すことを改めて経験しました。しかしやはりネパール、その後市場の人々はその周辺で各々場所を見つけてたくましく商売を続けています。(美澄)